

経済至上主義のなれの果てを憂う

佐生綾子

「アポ電」家にお金がいくらあるのかを電話で確かめてから強盗に入る。それで殺された女性のニュースをテレビで観た。

ここまで世の中がおかしくなってしまったのかと悲しむと同時に、経済成長、便利さを求め続けたための負の側面への諦念を抱かずにはいられなかった。

毎日電車に乗る度にホームのテロップに流れる人身事故（殆どが自殺なのだろうか……）の知らせにも、悲しみよりも諦念を抱く自分がいる。それが大したニュースにもならず、日常が営まれていることに、憂いを感じる。

電車に乗り込むと、スマホに視線を集中した人々に、抗うかのように私はコンビニで買った新聞を開く。ベビーカーに乗った乳幼児にスマホを預けている光景を見た日には、一段と世の中の未来を憂えずにはいられない。文庫本を読んでいる人を見つけ、少し心の穏やかさを取り戻す。

新聞記事には連日子供を虐待して死なせた親のニュースが報じられ、学校や児童相談所などの不手際などが指摘されるが、現場の大変さを想像する。そもそも親が自分の子供にそんなことをするような世の中にしてしまった私達にも連帯責任があるんじゃないか？そんな気さえしてくる。

少子高齢化の問題で、子供を増やせと言うけれど、虐待が連日報道されると、こんな世の中に子供を増やしているのだろうかと疑問を抱かずにはいられない。

この世の中の異常さの根源は何だろうかと考えた時、現金至上主義、経済至上主義が根源ではないかと思わされる。

そんなにお金があることが幸せなのだろうか……。

労働者が足りないから外国人労働者の受け入れを増やすと政府は言う。そんな簡単なことではないと思わされている。足りないから他の国から。それも人としてではなく、ただ労働力としての受け入れとしか感じられず、そんなことしたらこれまで以上にいろいろな問題が起きるであろうことは、素人の私でさえ想像がつく。

これだけサービス業が増えて人手が足りないのだったら、縮小することが必要ではないだろうか。私自身これからの世の中にサバイバル感を最近とても覚える。私達は年金も当

てにできないだろうし、国には頼れないから、自分の身は自分で守らなくてはいけない。そんな感じがしてきている。

お金があればなんでもできる世の中だけれど、私は無駄なサービスのためにはお金を使いたくない思いがふつふつと湧いてきていて、だからなるべくサービスを受けない生活にシフトしていくことを考えている。

しかし、都会に住んでいると、有り余るサービスに皆お金を払い、そのお金を払うために皆働いている。

乳幼児を保育園に預けてパートで働いたお金を使い家族で外食。本末転倒だと思うのは私だけだろうか？最近乳幼児を見る度に、この子も普段保育園に預けられているのだろうか？そんな視点で子供を見ている自分に気付く。

出来れば3歳ごろまでは、親元で育てて欲しいと思う。「三つ子の魂百まで」このことわざの重要性をとっても感じている。虐待する親は別だけれど。

シヨーウインドーを彩るクリスマス商戦も、福袋もバレンタイン商戦にも興味が無い私には、東京に住んでいてもあまり魅力は無い。それよりもその商戦の陰で排出されるごみが気になる。経済成長を妨げる。こんな人物を非国民と言うのだろうか。でも私は経済成長に幸せを感じないし、オリンピック招致にも反対だった。

2019年3月7日の読売新聞朝刊の記事「長引く再建仮説の孤独 東日本大震災から間もなく8年。岩手、宮城、福島の3県にある応急仮設住宅団地では、復興事業の遅れで行き場のない人が取り残され、入居者10戸以下の「小規模団地」が7割越を占める。行政やNPOなどの支援の先細り、長引く仮設暮らしによる体調悪化——。入居者は孤立感を深めている。」を読み、復興事業が遅れているのは、オリンピック招致をしたためだろうし、我国はオリンピックどころではないことを、改めて思わされた。

当時、オリンピック招致成功のニュースを観てがっかりした自分を、非国民だと感じながらインターネットで私と同じ思いの人がいないか探した。その時見つけたドナルド・キン氏の言葉に同志を見つけたような喜びを覚えた。

「率直に言う和日本人にはがっかりしています。力を合わせて東北の人を助けると思っていました。東京は（電気が）明るい。必要のない看板がたくさんある。忘れてるんじゃないか。まだやるべきことはいっぱいある」

オリンピック招致決定で大喜びしている安倍首相はじめ、多くの人々の喜びようをテレビで観て、がっかりしているのが自分だけではないことが嬉しかった。2019年2月24日にドナルド・キン氏の計報を知り、本当に悲しかった。

私も原発事故で初めて東京で使われている電力が、リスクを地方に押し付けた上での

のであることを知り、理不尽を感じた。

世の中は理不尽で満ち溢れている。その理不尽さを押し付ける側か、押し付けられる側か、その違いで人生は幸せと不幸に分離されてしまう。そんなことを最近とても感じる。

セブンイレブンが営業時間の見直しを考えているというニュースには「いいね!」と思った。名前の通りに7時から11時までの営業にするかどうか。

私もコンビニの電力の無駄使いをどうにかした方が良くはないかと大分前から思われていた。以前買った本『本当の夜を探して』都市の明かりは私たちから何を奪ったのか「ポール・ボガート著の帯に書かれた「コンビニ、自動販売機、屋外広告、街灯……過剰な光に蝕まれた都市に暮らし、夜を失った私たちの未来には、何が待ち受けているのか。広がりゆく〈光害〉の実像を追いながら、私たちが忘れてしまった自然の夜の価値を問い直す。」を改めて読み、こういう視点で私もこれから生活できたらと思った。便利さの陰には必ず負の側面があると思う。

「過剰な便利さは人の心を貧しくします」

これは一昨年(2017年)105歳で亡くなった日野原重明医師の言葉で、私は以前からこの言葉通りの世の中になっているとの憂いも感じていた。

この国は一体どこへ向かっているのだろうか……いや、わが国だけではない。世界中がおかしいようにも感じる。

2019年3月9日の朝日新聞の朝刊記事に憤りを感じた。「……『ベネズエラには二つの世界がある。一つは、国民の多くが閉じ込められた貧しい世界。もう一つは、権力者とエリートが楽しむ豊かな世界だ』……」

アメリカではトランプ大統領が壁を作ることに躍起だ。壁の向こう側と壁のこっち側。これも理不尽に満ちている。

私が仙台から下田に移住して間もない頃、2004年1月1日に雑記帳に記した文章を改めて読み、自分の価値観を強くした。

「今年は自分の思い描くライフスタイルに近づけるように何かをしたいと思った。多分それは、このきれいな海を守りたい。環境破壊をくい止めたい。子供たちのために豊かな自然をのこしたい」

これは、伊豆急行に乗り、大海原を見て書いた。その文章の近くには、ジャック・マイヨール氏の言葉

「空気も水も確実に汚染されている。テクノロジーの進歩によって。人はこれを勝利と言うが、実は敗北なのだ。私はいつも語り合う。海がこのことを許してくれたらと」があった。

東日本大震災から8年目の3月11日ふと考える。ジャック・マイヨールが生きていたら、あの原発事故での海洋汚染をどのように見ただろう。そして沖縄の辺野古の埋め立てを。プラスチックごみの海洋汚染も大変なことになっている。

私が出田にいる頃、ジャック・マイヨールの最後の愛弟子である日本人女性に会う機会に恵まれ、私はとても嬉しかった。その女性が直に聞いたジャック・マイヨール氏の言葉がとても心に沁みだ。

「人間が一番悪い。人間がいなければ、環境破壊はない」

私も一人の人間としてとても恥ずかしい思いになる。それならこれからどのように生きるべきかを考えさせられた。

2019年3月11日の読売新聞の中に見つけた、姜尚中氏の言葉

「……発生から間もない頃、福島県の被災地の村にテレビ番組のリポーターとして取材に行きました。福島原発事故の影響で、そこには家はあっても人の気配がありません。でも、堇の花が何事もなかったように咲いていました。それを見て、戦後の終幕だと感じました。ひたむきに豊かさを求め、技術の進歩を追及してきましたが、もはやそんな時代ではない。社会もほくも変わらねばならぬ。そう痛感すると、泣けて仕方がありませんでした」
が私の琴線に触れた。

沖縄の基地問題も、少し前まで他人事だった。でも、『標的の島 風かたか』というドキュメンタリー映画を観て他人事ではいけないと、強く思わされた。これだけの理不尽を押し付けられている人々がいるなんて。とても申し訳なく思うと同時に、戦争がなかったら、この問題も無かったはずだ。2度と戦争を起こしてはいけないとも思う。

「……自然の一部である人間が、母なる地球を痛めつけているということは、最終的に自分で自分の首を絞めているようなものです。そのことを忘れてしまっているかのようです。ジャックはよく「スロー・ダウン」ということばを発していました。それは、今あるテクノロジーで十分であり、人間に害を及ぼす物質の量を自浄作用に委ねることが出来る範囲まで下げることが意味しています。きれいな地球であったはるかむかしに戻ることはでき

経済至上主義のなれの果てを憂う

ません。だとすれば、「足るを知る」「(知足)」ではありませんが、徐々に生活そのものの見直しを個々人はもとより、行政も決断をしなければならぬ時期にきていると思います。つまり、資本主義に根ざしたこの社会システムを再考する必要がある。ということでしょう。手遅れにならないために……。」(『ジャック・マイヨールの遺産』竹谷和之編著)

読んで諦念を抱くと共に、今この思想を声を大にして世間に広めたいと思った。

コロナ禍以前に書いて応募した文章を、コロナ禍の今読み返し、尚更思いを強くした。



佐生綾子

さしょう りょうこ

1966 東京都世田谷区生まれ
宮城県泉高等学校卒業
第3回「石橋湛山平和賞」佳作
第11回「文芸思潮エッセイ賞」社会
批評佳作
第7回「石橋湛山平和賞」佳作
「日本総合医学会健康小論文」佳作
第15回「文芸思潮エッセイ賞」社会
批評奨励賞(写真は奨励賞のメダル)